香川県立保健医療大学リポジトリ

ボリビア多民族国におけるJICAボランティア事業視察報告

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-06-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡西, 幸恵, Okanishi, Sachie
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/253

香川県立保健医療大学雑誌　第8巻，71－78，2017

ボリビア多民族国におけるJICAボランティア事業視察報告

岡西 幸恵[1)*]

[1)]香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

A Report of Inspections of JICA Volunteer Activities in the Plurinational State of Bolivia

Sachie Okanishi[1)*]

[1)]*Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences*

要旨

独立行政法人国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊等事業理解促進調査団への参加要請により，調査団員としてボリビア多民族国を訪問し，現地にいるJICA 隊員の活動を視察した．本稿では，その視察内容を報告する．JICA 隊員は，異国の地に慣れることから始め，現地の人々を理解しながら現地の課題を明らかにし活動に取り組んでいた．日本での知識や経験を発揮しながら課題達成に向けて取り組み，グローバルな人材へと成長を遂げている．一方で，2 年間で得た経験と身についた能力を帰国後どのように活かしているのか，再就職先が決まらずにいるJICA経験者も多く日本での活動が不明瞭であった．JICA経験者による活動が身近に感じられるような地域社会への広報活動を検討し，JICA ボランティア事業への理解を促進していく必要がある．

Abstract

In response to a request from the Japan International Cooperation Agency (JICA), we participated in the “survey team for the promotion of understanding of the Japan Overseas Cooperation Volunteers and other activities” and visited the Plurinational State of Bolivia , as members of the survey team to conduct an inspection of the activities of JICA members in the country. The present paper reports the results of the inspection. The JICA members initiated their activities by becoming familiar with the local circumstances, and identified problems while achieving a better understanding of the local people. On the other hand, it is unclear whether or not people who have participated in JICA activities for two years are able to utilize their experiences and skills to become involved in meaningful activities in Japan; some former JICA members have had difficulty getting a job. It is necessary to promote public relations activities and public understanding of JICA volunteer activities in the community, so people feel that JICA activities are familiar to them.

Key Words: 独立行政法人国際協力機構（JICA）（Japan International Cooperation Agency (JICA)），ボリビア多民族国（Plurinational State of Bolivia）

*連絡先：〒761-0123　香川県高松市牟礼町原281-1　香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科　岡西 幸恵

*Correspondence to: Sachie Okanishi, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Takamatsu, Kagawa 761-0123, Japan

E-mail：okanishi@chs.pref.kagawa.jp

はじめに

独立行政法人国際協力機構[1)]（以下JICA）の青年海外協力隊等事業理解促進調査団への参加要請により，調査団員として，2015年９月５日から９月13日までの計９日間，ボリビア多民族国を訪問し，JICAボランティア事業について視察を行った．JICAからの依頼は，ボリビア多民族国で活躍するJICA隊員の活動現場や政府開発援助事業における施設，研究所等を視察し，JICAボランティア事業への理解を深めるとともに，JICAボランティア事業の理解促進に向けた活動推進について検討し報告することであった．本稿では，教職員および学生が国際協力活動に関心を向ける一つの機会となるよう，その視察内容を報告する．

視察の概要

１．目的

ボリビア多民族国に派遣されたJICA隊員の活動現場や政府開発援助事業である研究所等の視察を行い，青年海外協力隊現職派遣や民間連携ボランティア制度等，JICAボランティア事業への理解を深める．

２．期間

2015年９月５日～９月13日

３．視察内容

視察内容（スケジュール）の詳細については，表１のとおりである．視察は調査団６名で行った．

ボリビア多民族国の概要

ボリビア多民族国[2)3)]（以下ボリビア）は，2009年に先住民の権利拡大を打ち出した新憲法が制定され，国名が「ボリビア共和国」から「ボリビア多民族国」に変更された．

表１　視察スケジュール

月日	視察内容
9月5日 9月6日	成田空港発－ロサンゼルス－マイアミ－ ラパス－サンタクルス着（空路）
9月7日	助産師担当隊員活動現場 サンファン移住地視察 日本語教育担当隊員活動現場 高齢者福祉担当隊員活動現場
9月8日	サンタクルス発－コチャバンバ着（空路） 環境教育担当隊員活動現場 スポーツ担当隊員活動現場 教育関係の隊員との懇親会
9月9日	コチャバンバ発－ラパス着（空路） JICA事務所訪問 移住資料館視察 四国出身移住者，帰国研修員との懇親会
9月10日	特別支援担当隊員活動現場 日本ボリビア消化器疾患研究所訪問 JICA事務所関係者，ボランティアとの懇親会
9月11日 －13日	ラパス発－マイアミ－ロサンゼルス着（空路） ロサンゼルス発－関西空港着（空路）

ボリビアは，南アメリカ大陸のほぼ中央部に位置し，ペルー，チリ，アルゼンチン，パラグアイ，ブラジルの５か国に囲まれた内陸国で，国土面積（109.8581㎢）は日本の約３倍に相当する（図１）．９つの県で構成され（図２），地形は標高により３地域に区分されている．標高3000m以上の高原地域（ラパス・オルロ・ポトシ県）は国土の約３分の１近くをアンデス山脈が占め，年間を通じて寒冷である．標高1000～3000mの渓谷地域（コチャバンバ，チュキサカ，タリハ県）は年間を通じて温暖，標高1000m以下の平原地域（サンタ・クルス，ベニ，パンド県）は熱帯・亜熱帯気候であり，熱帯雨林やサバンナが広がる．人口は約1005万人（2014年），そのうち55％がインディオ（先住民），32％がメスティソ（混血），13％が欧州系の人々で構成される．ボリビアの公用語はスペイン語であるが，それ以外に，独自の先住民言語を母語とする先住民族が36存在する．色鮮やかな民族

図１　南アメリカ大陸全体図（黒塗り部：ボリビア）

図２　ボリビア全体図

衣装や古くから続く信仰など，伝統的な民族文化や生活習慣がある．

ボリビアは，1400年代後半よりインカ帝国の支配を受け，1500年代中頃より独立までスペインの統治下にあった．スペインの植民地時代には銀鉱が発見され，独立後もボリビアの主要産品としてボリビア経済を支えた．現在,亜鉛や鉛，リチウムなどの天然資源も豊富であり，日本にとって重要な輸入相手国として貿易経済関係も深まっている．特に，リチウムは，自動車や電気製品に使用される２次電池用の材料として，将来的に多くの需要が予想されている．観光名所として知られるウユニ塩湖には，世界のリチウム埋蔵量の約50％が存在すると言われており，その開発動向に世界各国が注目している．

一方で，ボリビアは，豊かな天然資源に恵まれながらも，富の不平等な分配が歴史上長く続き，南米で最も所得格差が大きい国である．また，国民の60%以上が貧困層に属し，失業率も高く，南米で最も所得水準の低い国である．これらは，多民族，複合文化，複雑な地形，内陸国であることが，国の発展を阻害する大きな要因として考えられている．

資源に乏しい日本にとって，ボリビアを支援することは，資源外交上の関係を構築する上で重要であり，日本は，「貧困削減のための社会開発支援」,「持続的経済成長のための支援」を基本方針とし，研修員の受入れ，専門家やJICA隊員の派遣，無償資金協力や技術協力等の支援を通して二国間の関係性を築いている．また，110年以上の移住の歴史と１万人を超える日系人の存在が二国間の友好関係促進の基盤になっている．

2009年には，ボリビア日本人移住110周年における記念事業として「ボリビア日本人移住資料館」が設立された．施設には，移住に必要なパスポートや生活必需品，日本人移住者のインタビューをパネルで展示するなど，日本人がどのようにボリビアで現在の地位を築いてきたのか，日本人移住史が紹介されていた（写真１・２）．

写真１　当時の移住者が所有したパスポート

写真２　移住に向けて準備された生活必需品

視察内容

１．JICA隊員活動

１）助産師担当隊員

ボリビアの妊産婦死亡率は206（出生10万人対），５歳未満児死亡率は39（1000人対）と推計され，改善されてきているものの，いずれも中南米地域では高い死亡率となっている．また，未成年の出産率も89人（1000人対）と高く[4]，妊産婦の教育レベルや施設分娩率の低さなどが関連しているといわれている．さらに，保健人材の配置には職種レベルの格差や地域格差がみられ，准看護師の56.1％は一次医療施設で勤務している[5]．そのため，一次医療施設で勤務する准看護師は，地域・農村部のプライマリーヘルスケアを率先して行う立場にあるが医療知識・技術が十分ではないために適切な保健サービスを提供できていないことも母子保健指標改善の大きな障害となっている．助産師担当隊員の活動先は，一次医療施設であるコミューンレベルの診療所（写真３）である．2012年に設立され2013年には分娩設備（写真４）が整った．この診療所においても，医師（プライマリ・ケア医）６名，正看護師４名，准看護師８名が勤務しており，産科医，小児科医といった専門医や助産師はいなかった．ボリビアの看護師教育課程は３か月の課程から

写真３　助産師担当隊員が活動する診療所

写真４　診療所の分娩室

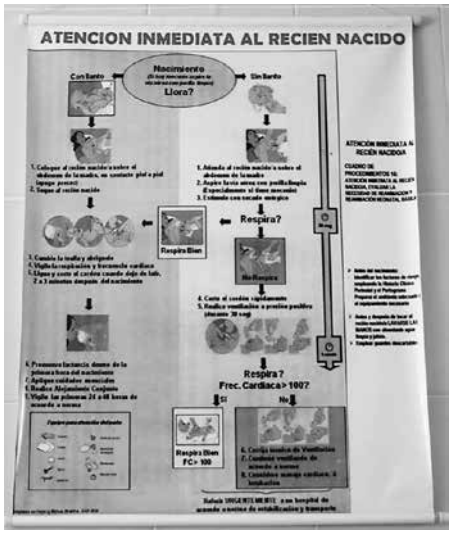

写真５　分娩手順を示すポスター

２年の課程まで様々なプログラムが存在するが，取得資格は准看護師である．正看護師は准看護師の資格取得後に大学に進学し取得できる．助産師教育課程はなく，現在大学を設立しているところである．診療所には，保健省が作成した分娩介助の手順を示すポスター（写真５）や分娩に必要な機材等が設置されていたが，専門的知識や技術を有していないために活用されていない状況であった．スタッフは，助産師担当隊員が行う分娩介助を見て技術を学んでいるとのことであった．助産師担当隊員は，診療所の整備やスタッフ教育を行いながら，診療所に訪れる妊産婦や新生児，乳幼児などのケアに対応している．また，地域のコミュニティリーダーと協力して，未成年の妊産婦や栄養失調にある子どもを対象に個別訪問し，家庭環境の調整や指導など行い，地域に出て積極的に活動している．

JICAボランティアへの応募のきっかけは，日本のへき地医療での経験であった．派遣当初は，スタッフや住民との信頼関係を築くことが大変だったと語り，２年の任期が終了することを想定して，自分の活動をどう残していくかを考えながら活動しているとのことであった．

２）日本語教育担当隊員

ボリビアの教育制度は２-６-６-４制であり，幼稚園２年，初等教育６年，中等・高等教育６年が義務化されている．日本語教育担当隊員の活動先は,サンファン移住地内にある「サンファン学園」である．日本ボリビア協会が運営する公立の小中一貫校であり，生徒数は約300人，日本語継承に力を入れている．サンファン移住地は，戦後，経済問題や食糧問題に苦しんでいた日本が打ち出した移民政策により，ボリビアへ移住した日本人で作られた街で，2015年に60周年を迎えた．当時は，区画整理もされていない密林を切り開くことから始め，様々な問題を乗り越えながら，現在は，教育や医療，福祉も整う一つの街になっている．　現在，サンファン学園は日系人生徒（40%）よりもボリビア人生徒（60%）が多くを占めるようになった．ボリビアの教育改革により，先住民言語と公用語であるスペイン語の２言語が必修となり，日本語教育は正規の外国語科目として認められず，授業外のクラブ活動として指導が行われるようになった．また，２言語を必須とするボリビア人生徒の負担を考えて，日本語教育は選択科目となったが，日本語教育を自ら希望するボリビア人生徒は少なく，保護者の意向が強く反映される現状から，サンファン学園では，日本語教育の必要性や日本語教育への興味をいかに持たせるかが課題となっている（写真６）．

日本語教育担当隊員は，ボリビアに派遣され約３か月の研修を終え，サンファン移住地での生活を始めたところであった．まだ現地の環境に慣れない状況であり，どのように活動していくか模索中であったが，日本の良さを日本語教育を通して伝えていきたいと力強く語っていた．

３）高齢者福祉担当隊員

高齢者福祉担当隊員は日系社会シニアボランティアで，サンファン移住地内にある「開拓者憩いの郷」と称される高齢者福祉施設で活動している（写真７）．この施設は，デイサービス，リハビリテーション，趣味の場として，誰でも利用できるように整備されていた．高齢者福祉担当隊員は，施設全体の企画から運営等を行い，

写真６　日本語教育の授業を受けるボリビア人生徒

写真７　高齢者福祉施設「開拓者憩いの郷」

写真９　環境教育担当隊員が携わったコンポスト場

写真８　サンファン診療所

写真10　スポーツ担当隊員と指導を受ける生徒たち

ソーシャルワーカーの知識や経験を現地に合わせて上手く取り入れていた．

サンファン移住地は，70歳以上を高齢者とし，当時入植してきた方々が高齢を迎え，2015年現在105名の高齢者がいる．介助を必要とする高齢者や独居老人なども増えており，早急な福祉政策を整備することが課題であった．高齢者福祉担当隊員は，施設に隣接する「サンファン診療所」（写真８）を利用する高齢者に聞き取り調査を行うなど，地域の現状や高齢者の要望を把握することから始め，高齢者のニーズに沿った支援策を検討していた．高齢者が移住地内で安心・安全に生活するために，保健・医療・福祉の連携体制が必要と考え，先を見据えた基盤づくりに力を入れた活動が行われていた．

４）環境教育担当隊員

環境教育担当隊員はティキパヤ市役所の廃棄物処理事業の担当部署に所属し，分別回収，ごみ処理，環境教育における活動を行っていた．ボリビアは，標高が高くごみの焼却処理ができない．ごみのポイ捨ても日常的である．分別の習慣がないために，埋め立て処分場のごみは溢れかえり汚水による問題も発生しているといったごみ処理問題が重要な課題となっている．現在，ごみ処理問題に対して生ごみを堆肥に戻す事業が進められ，環境教育担当隊員は建築の知識や経験を活かしてコンポスト場の建設にも携わっていた（写真９）．

JICAボランティアに応募したきっかけは，東日本大震災でのボランティア活動であった．訪問時は，任期が終了し引き継ぎ途中であった．帰国後の就職先はまだ決まっていなかったが，世界に携わる活動を続けていきたいと語っていた．

５）スポーツ担当隊員

スポーツ担当隊員の活動先は市内唯一の野球場である．JICAボランティア事業への応募のきっかけは，「野球がオリンピック競技から外されることを知り，野球を世界に広めたい，野球を通して学んだ思いやりの心や仲間作りなどを伝えることで，世界に貢献できるのではないかとの思いからJICAに応募した．」と語った．視察時は10人の生徒が野球の指導を受けており，子どもから大人まで参加していた（写真10）．サッカー文化のボリビアでは，野球を知らない人がほとんどであり，ルールやキャッチボールなど基礎的な指導を積み重ねている段階であった．言葉も上手く通じない中でも，身振り手振りのコミュニケーションを通じて指導ができていた．

６）特別支援教育担当隊員

特別支援教育担当隊員の活動先はラパス市にある公立小学校である（写真11）．クラス担任が特別支援の必要性を感じた子どもに対して隊員が支援を行っている．この隊員は，小学生の頃から海外に興味をもち，海外での生活に憧れていた．大学を卒業し特別支援学校で働きは

写真11　ラパス市の公立小学校の授業風景

写真12　日本ボリビア消化器疾患研究所

じめ，仕事にやりがいを感じるようになってJICAボランティアへの応募に至っている.「派遣当初は，結果を残すことばかりを考え，上手くいかないことを環境のせいにばかりしていた．活動を通して，日本の考え方や価値観で生徒を捉える視野の狭さへの気づきや本当の意味での特別支援は何かを考える機会にもなった．現地の教員が自分の活動に興味をもつようになるまでが大変であり，活動の半分以上は辛かったが，任期終了となりボリビアでの活動をもっと続けたい気持ちである.」と語った．視察時は帰国間近であり，帰国後は海外と繋がった仕事を何か見つけたいとのことであった.

2．日本ボリビア消化器疾患研究所

消化器疾患研究所は，日本の無償資金協力により建設された病院である．乳児死亡の主な原因が下痢症であること，食生活の西欧化により，以前少なかった胃がん，大腸がん，膵臓がんなど，消化器疾患が増えている現状から，ボリビア政府が日本に対して消化器疾患研究対策に関する技術協力および消化器センター建設に向けての協力を要請した．現在は，技術協力の一環として，長期にわたって専門家を派遣し技術指導が行われ，日本への研修員の受け入れ等も行っている．ボリビアは，非感染症疾患（高血圧，糖尿病，がん）による死亡率が644（人口10万対）と高くなっている一方で，感染症疾患による死亡率が253（人口10万対）と依然として高く二重の疾病構造への対応が迫られており[5]，その対応策についても検討が重ねられている．研究所内には日本で研修を受けた医師も多く，訪問時は日本語で挨拶が行われるなど親日的な雰囲気であった．設立当時から今までに提供されたX線撮影装置やCT撮影装置などの医療機材は全て大切に使用されており，研究所内には日本の協力で建設されたことを示す資料も多く展示されていた（写真12・13）

写真13　22 年前に日本から提供されたCT

JICAボランティア事業理解と課題

今回の視察先および懇親会で出会ったJICA隊員は，派遣されたばかりの隊員から帰国間近の隊員までいた．異国の地で慣れない生活に苦労しているとの声，少しずつ慣れ余裕を感じられるようになってきたとの声，もっと活動を続けたいとの声などが聞かれた．派遣されるまでは，現地でどのような活動を行うか想像できない状態であったが，日本と異なる環境や文化に慣れることから始め，現地の人々を理解しながら課題を整理していくことで自分のやるべき活動が明確になっていた．現地の課題を明確にし，活動を開始するまでにかかる時間はJICA隊員それぞれ異なっていたが，現地のJICA事務所におけるフォローアップ体制も整っており，JICA隊員が安心・安全な環境で活動していることを確認できた.

JICAボランティア事業の目的は「開発途上国の経済・社会の発展，復興への寄与」,「友好親善・相互理解への強化」,「国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元」である．ボリビアを支援する日本の最優先課題は「貧困削減のための社会開発支援」であり，特に教育，保健・医療，水と衛生といった分野で活躍できる人材をJICA隊員として多く派遣していた．JICA隊員の任期は2年と短く，派遣期間が終了しても現地の人々が継続できることを念頭においた活動が行われていた．その活動には，それぞれの専門的知識や経験を現地に合わせたものへと変換させて取り入れ，日本の良さや価値が込められていた．現地での経験は，課題解決力や適応力，人との調整力，コミュニケーション力などが身につき，グローバルな人材として成長を遂げていることを確認すること

ができた．

しかし，JICA経験者の帰国後の活動が不明瞭である．実際に任期が終了した２名のJICA隊員は帰国後の就職先が決まっていなかった．世界にかかわる仕事に就きたいと語るが，海外を拠点に活動したい思いも強く感じられ，帰国後の社会貢献について明確に考えられていなかった．

JICAボランティア事業への理解を得るためにも，帰国後の日本での活躍は必須ではないだろうか．「青年海外協力隊帰国後進路状況・社会還元活動調査」[6]によると，帰国後は，民間企業（24％）や地方公務員教員職（14％）に就きながら，体験談発表を通じた国際理解教育や自治会活動，子育て支援，福祉・慈善活動，環境保護活動等の社会還元活動に取り組んでいるとの報告がある．しかし，JICA経験者による活動が地域社会に触れる機会はまだまだ少なく，身近に感じられるまでには至っていないのではないかと考える．実際に，著者は，今回の調査団参加をきっかけに初めてJICAボランティア事業について調べた．これまでJICAという言葉を耳にしたことはあっても身近に感じられることはなかった．JICA隊員の中には家族からの理解を得られなかった，現職参加制度がなく退職せざるを得なかったとの声も聞かれ，JICAボランティア事業についての社会的認知度は低い状況にあると考える．教育の場においても同様で，学生が国際関連科目を受講していても，JICA経験者と交流することや学生自身が海外に興味関心をもつことがない限り，学生にとって，JICAボランティア事業は身近に感じられるものではないだろう．

教育の場，職場，地域など様々な領域において，JICA経験者が国際協力活動を伝えていき，JICAボランティア事業への認知度を高めていくことが必要である．日本各地には，地元出身のJICA隊員を派遣中から帰国後まで支援する「協力隊を育てる会」[7]がある．この団体は，民間の立場から国民にJICAボランティア事業への理解を求め，JICAボランティア事業に対する民間支援の輪を広げていくことを目的に活動している．JICA経験者を地元企業で活用できるような働きかけや現職参加制度の推進等も行っている．JICAボランティア事業について地域社会への理解を得るためにも，「協力隊を育てる会」と連携して広報活動を行うなど，JICA経験者が主体となって広報活動の在り方を検討していくことも必要であると考える．

おわりに

今回の視察の目的は，ボリビアで活躍するJICA隊員の活動現場を視察し，JICAボランティア事業について理解することであった．調査団員として視察が決まり，ボリビアがどこに位置し，どんな国で，どんな支援をしているのかについて事前に調べ，実際に視察現場を確認することでJICAボランティア事業についての理解が深まった．また，JICA隊員の多くは著者と同年代であり，大変な苦労を重ねながらも生き生きと活躍する姿は，非常に良い刺激となった．

JICAボランティア事業を理解するためには，まずは興味をもち知ることから始まる．学生が国際協力活動に興味関心をもち，世界に目を向ける一つの機会となるよう，今回の視察を通じて，肌で感じ，直接見て学んだことやボリビアで懸命に活動を行うJICA隊員について，国際協力活動等を知らない学生に向けて積極的に発信していきたい．

文　献

１）独立行政法人 国際協力機構（JICA）．各国の取り組み ボリビア，2016-9-30，https://www.jica.go.jp/bolivia/

２）外務省．わかる！国際情勢ボリビア～リチウム資源開発に託す夢，2016-9-30，http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol68/

３）外務省．中南米 ボリビア多民族国，2016-9-30，http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/latinamerica.html

４）日本ユニセフ協会．世界子供白書2015〈要約版〉統計表 世界の国々および地域の経済・社会に関する統計，2016-10-30，https://www.unicef.or.jp/library/sowc/2015/pdf/15_02.pdf

５）独立行政法人国際協力機構（JICA）．保健セクター情報収集・確認調査　ボリビア多民族国保健セクター分析報告書，2012.

６）佐藤真久．青年海外協力隊帰国後進路状況・社会還元活動調査，独立行政法人　国際協力機構　青年海外協力隊事務局，2012．2016-9-30，https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/report/pdf/shakaikangen_01.pdf

７）一般社団法人 協力隊を育てる会．2016-9-30，http://www.sojocv.or.jp/

受付日　2016年10月３日
受理日　2016年12月15日